

人の一生を重き荷
を負ふて遠き行
くが如し急ぐ可
らず

下ゐるれ供物料御飯料と致して寄進仕
 る極「是れは冷光院殿かし御蓮
 足で居せられまへ」内「外に二百兩
 極」此二百兩は内「た寺御本堂庫理判
 普請御修葺料に寄進仕ますれ納め置
 き下さるやうに極」ア、何うも是れは
 て居るゝのことで定めし冷光院殿はなほ
 でござら内「又々百兩極」此百金は
 内「御法庫に付きは皆折下すつたは賃借
 の盛州公に何人來いれ分れの康尼足
 三石君の淺野權から幾人來い内「匿名
 防の兄池田家へ縁もあるから、備前
 の池田公に何人來いと、斯ういふ一つ
 の相談があるのならう、是れは尤も千萬
 と思ひましたら極」愛細承知致した
 と、御相談の果てますまでは小坊主
 の一人も是れへ近づがぬやうに申附番
 ぐでござらう、其れ様例にれ酒とれ煙

互扶掖を期する事

因、時々郊外遠足又は運動會を催して
元氣を鼓舞する事
青年會の成立は識者有志の贊助を要す
るは勿論にして我商業會議所又は同業
組合の如き團體が中樞主腦となりて其
衝に當られんことを望み又之を快諾せら
る

靜躁昏明 一記者

一記者

て事落着を告げぬるは吾人讀者諸賢
共に同慶至極に存ず、然るに茲に言

11

統盛の漫りに山縣氏に制肘を加へて民をして却て其の愚劣なるを怨せし

るから只
も置けな
い新うい

(卅)

ば最^しう料^{りょう}
理^り番^{ばん}もつち
やんどもつち



得まして、同、關忠右衛門傳出
 大才勇健酒の大樽が人が大きな白鉢の
 徳利を持つて作つて、樽の下に惜りも
 なく酒を明く。堀部安兵衛赤井堀原
 は口脂摺をして難遊がつて居る料理は
 一同驚き探つて食へるといふ。是れで
 食過ぎるとチト眠氣が出る位のもので
 此食卓の方で心機が亂れる氣遣ひはな
 い、食事が終つて仕舞ふ内殿之助は用
 意の荷物を取出して、内、扱て方々々
 下さるやう、明十四日、本所松坂町吉良
 左兵衛佐田宅へ亂入は夜の九つと合圖
 と致し、表御門へは斯くいふ内殿之助
 と致し、表御門へは斯くいふ、裏御門へ

如^二廿四人之姓名^一を唱へ、いふは假名の印しを用ゑるに由りて、^三佛主税を先手として二十三人之を西組と唱へ、^四いはれ假名の印しを用ゑるに由りて、^五是れは表に参る二十四人の姓名、^六此方は裏御門に参る二十三人の姓名、夫れにてれ見分け下さるやう」と渡す。

廣　告



三巴醬油
釀造湯

最上醬油

電話 七五三番
話 七五三番

ロッキ
70
最良
龍
に國産
日産油

景福宮拂下建物
温突賣却

瓦期ユークス 贈
京城南山町三丁目(電話二四九番)
酒井組出張所

內兒科
小兒科
梅毒淋病
高井醫院
京城壽町三丁目
電話二二六

院長 陸軍軍醫正 高井 貞治

麻裏和洋酒雜貨販賣
龍山元町三丁目(電話三二九番)
中谷商店

焦心單志多年爲斯望於
微義美言恍然似有得者
鑒推斷斷微茫洋辭愈
騰素面輕改也
京城本町五丁目
易斷觀一二

提灯 新規張替 大勉強

並に硝子看板印物園進
京城本町一丁目裏通
藤井提灯店

●諸公債、諸株券、現物賣買、迅速確實に御取扱可申候兼業

京城本町三丁目田中友士

商店發電署(夕)

●永見割首儀の召を

を生じ副會長金澤鉉を擁して會長李容陽

九如かす此際彼の會長たるを排斥は一

萬圓にして二百尺の桁六個、三合

より近き辭職するとの事なり

令訓令等一切の關係法規を準用せられたき事

●金出張所の開設
銀行にては新嘉坡に出張所を開設

内閣にして出来ずばイツン民團
やせをせむべし。

貯蓄預金 一口壹錢以上何程に
 (利息日歩壹錢二厘)
 長崎貯蓄銀行代理店